

○ 牧野標本館雑誌 (4) (檜山庫三) Kōzō HIYAMA: Miscellany from Makino Herbarium (4)

コアサダ アサダ (*Ostrya japonica* Sarg.) は小枝や葉に毛と腺毛を混生するものが正型とされていて、腺毛のなくなったものはコアサダと呼ばれているが、両者の間には腺毛の量にいろいろの程度のものが見られるのが普通で、あまりはっきりした区別のあるものではなく、分布もコアサダはアサダと一致するから、コアサダを品種 (forma *homochaeta* Hiyama) として認めておきたい。

Ostrya japonica Sarg. forma **homochaeta** (Honda) Hiyama, stat. nov.
Ostrya japonica var. *homochaeta* Honda in Bot. Mag. Tokyo **47**: 433 (1933).
Nom. Jap. Ko-asada.

オニミズヒキ (新称) ミズヒキ (*Tovara filiformis* Nakai) の花軸は一般に無毛であって、この特徴はシンミズヒキ (*T. neofiliformis* Nakai) との識別点として用いることができるが、ミズヒキにもまたたきに花軸の有毛なものがある。しかし、この場合でもミズヒキのその毛は斜上向する細くて長さ 0.5 mm ばかりのものであるから、軸面にぴったりと伏した 0.2 mm ばかりの長三角形のような硬毛をもつシンミズヒキとの区別は容易である。花軸有毛のミズヒキは上野館林、武蔵東京、同渋谷、下総手賀沼、伊勢島津村、加賀河野村、若狭遠敷村、琉球八重山産のものが標本館にあって、常品に比すれば稀である。これをオニミズヒキ (*T. filiformis* forma *trichorachis* Hiyama) と新称したい。

このオニミズヒキの斑葉品が越中黒部に産するので、これにフイリオニミズヒキ (*f. amabilis* Hiyama) の名を与える。

Tovara filiformis (Thunb.) Nakai forma **trichorachis** Hiyama, nov. f.
Rachis inflorescentiae pilis 0.3–0.5 mm longis pubescens. Cetera ut in typo. Nom. Jap. Oni-mizuhiki, nov.

Hab. Hondo: Prov. Kozuke; Tatebayashi (T. Makino, 1911); Prov. Musashi, Tokyo (Makino, 1903—holotype in Makino Herbarium), ibid. (Makino, 1921 & 1922), ibid. (Makino, 1900); Prov. Shimosa, Teganuma (Makino, 1924); Prov. Ise. Shimazumura (Kuwana, 1906); Prov. Kaga, Kawano-mura (K. Hisada); Prov. Wakasa, Onifu (H. Izaki, 1910). Ryukyu: Yaeyama (leg.?, 1909).

forma **amabilis** Hiyama, nov. f.

Folia flavo-variegata. Ceterum f. *trichorachi* simillimum.—Nom. Jap. Fuirionimizuhiki, nov.

Hab. Hondo: Kurobe, Prov. Ecchu (T. Makino, 1935—Type in Makino Herbarium).

シンミズヒキが中国に分布する

標本館に中国福建省建陽産のシンミズヒキ (*Tovara neofiliformis* Nakai) の標本が 1 枚ある。採集者名と採集年月の記入がないが、シンミズヒキであることに間違いない。日本の普通品に比べると全体に毛がやや著しいように感じるものであるが、これと同じ形は肥後飽託郡金峰山 (上妻博之, 1905. 8. 28) にもあり、別に区別するほどのものではない。中国にはミズヒキ (*T. filiformis* Nakai) の産する記録はあるが、本種は未知のものであった。

***Tovala neofiliformis* (Nakai) Nakai**

Hab. Prov. Fukien, China. (leg.? in Makino Herbarium).

Distr. Japonia, Korea & China. New for China.

ホソバイノコヅチ (新称)

山本一氏が伊予上浮穴郡中津山で 1917 年 8 月 17 日に採集されたイノコヅチ 1 種の標本上に牧野先生がナガバイノコヅチ (新称) と手記されたものがある。これは同名のナガバイノコヅチ、即ちヤナギイノコヅチ (*Achyranthes longifolia* Makino) とよく似てはいるが同物ではない。その茎は直立し、枝は上向又は斜上して、ヤナギイノコヅチのように水平に枝をうつてやや散開性となるようなことがなく、葉形はヤナギイノコヅチと区別がつかねるが、両面には立った明かな毛を散生し、葉縁や葉柄にも開出した毛があって、葉表面には光沢が全くない。小苞付属物は広楕円形、円～鈍円頭で 5—9 mm の長さがある。この者がヤナギイノコヅチの多毛品でないことは、以上の特徴からも明かであって、ヤナギイノコヅチとヒナタイノコヅチ又はヒカゲイノコヅチとの間の雑種のようにもあるし、またヒカゲイノコヅチの変形のようにも考えられるが、ここではヒカゲイノコヅチの一品と認めて、これをホソバイノコヅチ (新称) と呼んでおく。葉面の毛は 0.3—0.5 mm の長さがある (ヒカゲイノコヅチでは 0.7—1 mm, ヤナギイノコヅチでは 0.25 mm)。

なおヒカゲイノコヅチとヒナタイノコヅチの関係であるが、その主要な異点とされる仮雄蕊の形や小苞付属物の大きさなどにも、どっちつかずのものが現われるし、時には両者相互の特徴が混りあったものがあること、分布の上から何等の相違を認めがたいことなどから、この二物を別種とみなすことにはかなりの無理があると思う。両者の関係については後記の synonymy を参照されたい。ハチジョウイノコヅチは結局ヒカゲイノコヅチの海岸型にすぎぬものであって、両者の間には中間形がよく見られる。

***Achyranthes Fauriei* Lév. & Van., Okuyama in Journ. Jap. Bot. 10 : 263 (1934).** var. ***Fauriei* forma *Fauriei*.** Nom. Jap. Hinata-inokozuchi.

forma ***tomentosa*** (Honda) Hiyama, stat. nov.—*Achyranthes Fauriei* var. *tomentosa* Honda, Nom. Pl. Jap. ed. em. 373 (1957). Nom. Jap. Oni-inokozuchi.

var. ***japonica*** (Miq.) Hiyama, comb. nov.—*Achyranthes bidentata* Bl. var.

japonica Miq., Ann. Mus. Bot. Lugd. Bat. **2**: 132 (1865—'66).—*A. japonica* (Miq.) Nakai in Bot. Mag. Tokyo **34**: 39 (1920).

forma **japonica**

Nom. Jap. Hikage-inokozuchi.

forma **angustifolia** Hiyama, nov. f.

Caulis erectus adpresse pilosus, rami non divaricati. Folia lineari-lanceolata vel lanceolata, longe caudato-acuminata basi acuta vel obtusa, opaca, 5—8 cm longa 1—3 cm lata, utrinque pilis 0.3—0.5 mm longis patentibus parce sed distinctius pilosa. Bracteola dentibus late ellipticis apice rotundatis vel obtuso-rotundatis 5—9 mm longis suffulta. Nom. Jap. Hosoba-inokozuchi, nov.

Hab. Shikoku: Mt. Nakatsu, Prov. Iyo (H. Yamamoto, Aug. 17, 1917—holotype in Makino Herbarium).

forma **hachijoensis** (Honda) Hiyama, stat. nov.—*A. japonica* var. *hachijoensis* Honda in Bot. Mag. Tokyo **46**: 371 (1932). Non. Jap. Hachijō-inokozuchi.

欧州種のアマトグサ

“欧州産 *Cynocrambe*” と手記のある 1 枚の標本がある。これは東京で栽培されたもので、1893 年 10 月 3 日の日付があるが、これで見ると、牧野先生が日本のアマトグサ (*Thelygonum japonicum* Okubo & Makino) を研究されていた直後にあたるから、欧州種との比較研究のためにわざわざ種子を取り寄せて播かれたものであったように思える。この標本には花がなく、種名も和名も記してないが、このものは地中海沿岸地方原産の *Thelygonum Cynocrambe* L., Sp. Pl. 993 (*Cynocrambe prostrata* Gaertn.) である。おそらく、今日はこの欧州種の生品は絶えてしまったであろうが、先生を記念してこれにアキノアマトグサの新和名を与えておきたい。

フクリンキブシ

キブシの栽培品に葉の縁が黄色くいろどられたものがあるが、標本館には 1944 年 5 月、東京代々木で採集の標本がある。採集者の記入はないが、たぶん牧野先生かと思われる。標本には *Stachyurus praecox* Sieb. & Zucc. var. *aureomarginata* Makino, var. nov. の手記があるので、これを品種の級位でここに記載する。

Stachyurus praecox Sieb. & Zucc.

forma **marginatus** Hiyama, nov. forma.

Folia aureo-marginata. Cetera ut in typo. Nom. Jap. Fukurin-kibushi.

Hab. Hondo: Tokyo, Prov. Musashi, cult. (May, 1944, leg.?—holotype in Makino Herbarium).

ユウシュンラン

ユウシュンラン (*Cephalanthera erecta* Bl. var. *subaphylla* Ohwi) は北海道、本州、九州に産することが知られていたが、標本館には土佐の横倉山で 1889 年 5 月 6 日に

牧野先生が採集された標本があるから、四国をその分布区域に加える。なお、この標本には“Max. 329”なる控え番号があるが、これは Maximowicz に送った控え標本である。

Cephalanthera erecta Blume var. *subaphylla* (Miyabe & Kudo) Ohwi, Fl. Jap. 361 (1953) comb. subnud.; in *Bull. Nation. Sci. Mus.* no. 33: 69 (1953). Nom. Jap. Yūshun-ran.

Hab. Shikoku: Mt. Yokogura, Prov. Tosa (T. Makino—May, 1889). New for Shikoku. (東京都立大学理学部牧野標本館)

牧野標本館雜記 1—4 を総括して下記の取扱いとする。

牧野標本館業績, 第 5. Contribution no. 5 from Makino Herbarium, Tokyo Metropolitan University.

□ Siro KITAMURA: **Flora of Afganistan**, pub. by Committee of the Kyoto University Scientific Expedition to the Karakoram and Hindukush, Kyoto University (1960). 1 colored frontispiece, 486 pp. including index and 105 full page figs.

本書は京都大学北村二郎教授の著作で、同大学カラコルム及ヒンズクシ學術探検委員会発行にかかる B5 版 486 頁からなる大著で純学術的の労作である。口絵には Nuristan 地方 (2500 m) の草原と、Shibar 峠 (2700 m) 附近の景観とを示してある。また本文中には一頁大の植物写生図 105 枚が遺入っていて、まことに記念すべき出版 (1960) である。非売品 (久内清孝)

□ Iwao HINO: **Icones Fungorum Bambusicolorum Japonicorum** 335 pp. 1 pl. 173+21 figs. (1961).

日野巖博士 (山口大学) は数十年来斑竹菌をはじめとして竹類につく菌類と取組み、戦後は同教室の勝本謙氏の助力を得て新種、既知種を問わずすべて精細な図と記載を添えて、数回に亘り同大学紀要に発表して来た。今回これを基礎とし、総論的記事と斑竹に関する記事を添え、集大成したのが本書である。取扱われた 173 種の大部分が著者及勝本氏の新種であることを見ても、無人の境を行くの覬がある。本書で発表の新種も若干ある。記載はすべてラテン。斑竹に関する 21 図及委しい記事は菌類関係以外の人々にも興味が持てよう。(小林義雄)